

ローマでミサ曲を歌う

＊

小島雅彦●こじま皮膚科クリニック（平塚市）

一昨年の暮れのこと、家内とアルフィーの高見沢俊彦のコンサートを聞きに行った時、会場で配られたチラシで、その公演の指揮担当の西本智実さんが率いるイルミナートフィルハーモニーオーケストラと合唱団の存在を知りました。

そのチラシは「2018年ヴァチカン国際音楽祭」についてのもので、11月にヴァチカンの教皇代理ミサでグノー作曲の『聖チェーリア荘厳ミサ曲』、同じくローマの聖パオロ大聖堂で、ヴェルディ作曲の『レクイエム』を西本さんとイルミナートフィルハーモニーオーケストラとともに6年連続で訪問して演奏する、というプロジェクトの案内でした。

合唱団の事務局に問い合わせたところ、男声は大歓迎とのこと（メンバーが少ない）でしたので早速参加することに決め、2018年3月より10月22日の池袋芸術劇場での日本本番に向け、月2～3回、計約20回の新宿で行われる練習が始まりました。

合唱団は、女声が約200人に対し男声が約20人しかおらず、非常にバランスが悪く心配しましたが、本番ではプロのエキストラを雇うという事なので安心しました。

合唱団のメンバーは平均65歳といったところで、ヴァチカン公演にもリピート参加している方も多いうでした。



聖パオロ大聖堂

合唱指揮の先生は、いくつもの合唱団を指導している先生で、特にヘタのまねが上手で、またジョークも洗練されていて楽しく練習を続けることが出来ました。

日本の本番は、グノー 25分、ヴェルディ 90分の大曲を一夜で演奏するというヘヴィーなプログラムでした。

10月の西本先生の1回の合唱指導とオーケストラとの2回のゲネプロを経て、10月22日の日本公演が超満員の聴衆のもと成功裏に終わり、いよいよ11月8日にローマに向けて飛び立ちました。

日本からローマに向かったのは女声150人、男声20人といった処で、翌9日の練習には男声30人のイタリアのプロ歌手の参加を得て、女性150人男声50人の編成で本番に備えます。

教会での練習のため残響が多く、また西本先生の指揮も見づらくて合唱とオーケストラのタイミングがどうしても合いません。私の隣のイタリア人歌手などは、「ヴェルディの曲は、こんなもんじゃねーよ」と云う感じで勝手なタイミングで歌う始末でした。

翌10日はいよいよ16時からヴァチカンでのグノーのミサ曲の本番です。

13時からのヴァチカンでのゲネプロはヴェルディも練習しましたが、会場も広く、残響の影響が少な



ヴァチカンでのリハーサル（グノー）



ヴェルディ本番（聖パオロ大聖堂）



西本指揮者と私（後列右から3人目）

いのと、エキストラのプロ歌手たちも本気になって指揮に合わせようとしたせいもあり、何とか形が仕上がりました。

本番は教皇代理の高位の枢機卿が主催するミサで、その進行に合わせて演奏します。

曲のクライマックスでパイプオルガンの響きが加わると、キリスト教徒でない私ですが、荘厳な雰囲気圧倒させられました。

約2時間のミサの後、枢機卿より謝辞があり、西本さんとこの合唱団が、九州の隠れキリシタンの間で、永くオラショと呼んで語り継いできたグレゴリオ聖歌の一節を、450年ぶりにヴァチカンで復活演奏した功績がたたえられました。日本の隠れキリシタンの世界遺産への登録に少なからず貢献したでしょう。

翌11日はいよいよヴェルディのレクイエムのリハーサルと本番です。

聖パオロ大聖堂は、観光地としては知られていませんが、4世紀につくられたモザイク装飾と何本もの列柱が美しい大聖堂です。

リハーサルで音の響き、残響の長さを確認し、いよいよ21時より本番が始まりました。

西本先生の本番での指揮の姿はまさに「カッコいい」の一言で、さすがのイタリア人男声歌手たちもその実力を認めたようで、起伏に富んだ大曲を最後まで弛緩することなくうたいあげました。アマチュアが20回練習するところを3回で形にするプロの実力を実感すると共に、会場を埋めた2,000人以上の喝采を受けて、8ヶ月間の練習の苦労が十分に報われた気がしました。

本番の後ホテルに帰ったのは1時を過ぎましたが、心地よい疲れと達成感に満たされた一夜となりました。

その後、合唱団は現地解散となり、私と家内はパルマとミラノのヴェルディゆかりの地を観光し、帰国の途につきました。

今後このような企画があったらどうしようかと思いますが、ヴェルディのレクイエムは一つの頂点の曲なのであとはブラームスのドイツ・レクイエムくらいしか食指が動かないのが現在の気持ちです。



3年振りの登場です。



宮本秀明●宮本皮フ科（横浜市磯子区）

最近はウハウハ儲かるクリニックを「ウハクリ」、潰れそうなクリニックを「ツブクリ」と呼ぶんだそうである。

1. 尾張名物「ひつまぶし」

……ではない。「ひつまぶし（暇潰し）」が必要なほど患者が来ないMクリニックは当然ツブクリである。

M院長は、開業すれば1.外車 2.別荘 3.ゴルフ会員権 4.クルーザー、そして5.いわく有り気な別宅!?が手に入ると聞いたが、開業して10数年後の現在、5つ中の1つもM院長の手にはない。叶ったのは「昼寝が出来るよ」だけであったがこれも思惑が外れた。昼寝なんてのは昼休みにするものだと思っていたが、なんと診療受付時間内にも安眠を貪っているのだ。文字通りツブクリだが「潰れそうでなかなか潰れないねー」などとM院長はまるで他人様の様なスタンスである。それ故依然として右肩下がりが続く。

2. 医学部の「不適切入試」

「不適切な関係」と言えば男女間のドロドロした関係を指すのだろうか。しかし最近では芸能界だけでなく国会議員間でも「不適切な関係」だらけでそんな3面記事ネタは耳舐肌（みみたこ）になってきたが、このタイミングで「医学部不適切入試」とは良いネタが見つかったものである。

某私立医学部でa.「女性不利」b.「多浪不利」c.「卒業生の子弟有利」の選択をしていたのをマスコミが咎めたのだが、是非はともかく大体の受験生周辺にとってa.b.c.は初耳ではないし、最初の標的となった大学だけでなく同様の事をしていた大学名が後からぞろぞろ出てきた。……私立医学部ならほとんど

みんなやっていたのである。

3. 国立医学部は？

私立医学部がそんな具合でも国立医学部入試は「不適切入試」では無いかというと必ずしもそうとも言えない。某国立医学部は入試科目の理科を物理、化学指定にして生物では受けられないようにしたり、また別の国立医学部は2次試験を数学1科目にしていた。こうすると女子受験生は減る。

地域枠だの推薦入学も怪しげである。地域枠というのは明らかに差別といえば差別であるし、推薦入学といっても地元優先が多く、首都圏から過疎地医学部を受けても公平に評価してくれるかどうか、はなはだ怪しい大学もある。

4. 昔は公平だったか??

今は昔、京都大医学部に55歳で入学した高校の理科の教師がいた（既に故人。もし生きてりゃ100歳超!）。私が医学部に入学した同じ年の出来事である。彼は妻子持ちだったが、55歳を単純に計算すれば37浪である。彼は6年後（昭和54年）に卒業し8回目の国試で合格した。当時は国試は年2回あったので卒後3年半で医師になり、NHKで「64歳の新人医師」として紹介されたこともあった。64歳といえば病院勤務をしていたら定年退職する頃である。

はてさて「多浪不利」の条項の無い「不適切でない入試」とは上記のような状況を言うのだろうか。

そういえば当時は国立医学部は面接試験など無かった。その後「頭は良いが医師に向かない学生」が散見されたことから面接試験が採用されるようになったが、最近破廉恥な事件は枚挙に遑が無く、面接試験採用後に学生の質が良くなった様には到底思

えない。しかも面接は主観が入る余地が大いにある。

某医師は面接が不得意なご息のため、妻をも巻き込んでネットの口コミなどで幾つかの医学部の過去の面接内容を調べあげた。そして単純な事柄（医学部を目指した動機、親友はいるか、高校の部活は何をやっていたか……程度）しか尋ねず、しかも面接に点数を付けずに面接結果は○か×かだけで判断する医学部を探し出し、ご息は無事入学を果たし医師になった。医学部入試の当落付近は接戦なので、面接官のその日の匙加減で落とされたら泣くに泣けぬ。

5. 平等、公平とは？

世の中に平等、公平なんてのを実現させるのは至難の業である。簡単に実現できればウハクリ、ツブクリが混在する訳がない。

ツブクリのM院長も「ふるさと納税」を利用して

米、蕎麦、玉蜀黍、梨、林檎、枝豆、蜜柑、苺、柿、西瓜、アスパラガス……を入手し、スーパー等では全く買わずに妻と2人暮らしの糊口を凌いできた。ところがふるさと納税に使える額は収入にほぼ比例するので右肩下がりのM院長はふるさと納税に使える額が徐々に減ることに最近気付き呆然となった。

某々先生曰く「そんなにクリニックが閑散としていいるなら作家になればいいじゃん」。いやー、作家で暮すのは厳しい。明治時代の作家・斎藤緑雨(りょくう)の名言に「筆は1本也、箸は2本也……」がある。生活即ち箸は2本必要なのに、筆1本では食えないという意味らしい。斎藤緑雨どころか、あのロシアの文豪トルストイだって小説でなかなか食えず料理本を書いて生活の糧としていたのである。えー、初耳だって。結構有名な本なのだがね。その料理本の名前は「あんなカレー煮な」なーのだ。(完)

